



さわれた話

不良達の手箆めに

僕^もの知らない所で

気になるあの子が

放課後。

いつものことではあるが、特に用事があるわけでもなかった。僕はその日、少し冒険してみることにした。ひとりカラオケだ。

教室で久保さんにカラオケの話振られて、ちよつと練習……いや、好きなアニメの主題歌をカラオケで歌いたかったのだ。それだけだ。

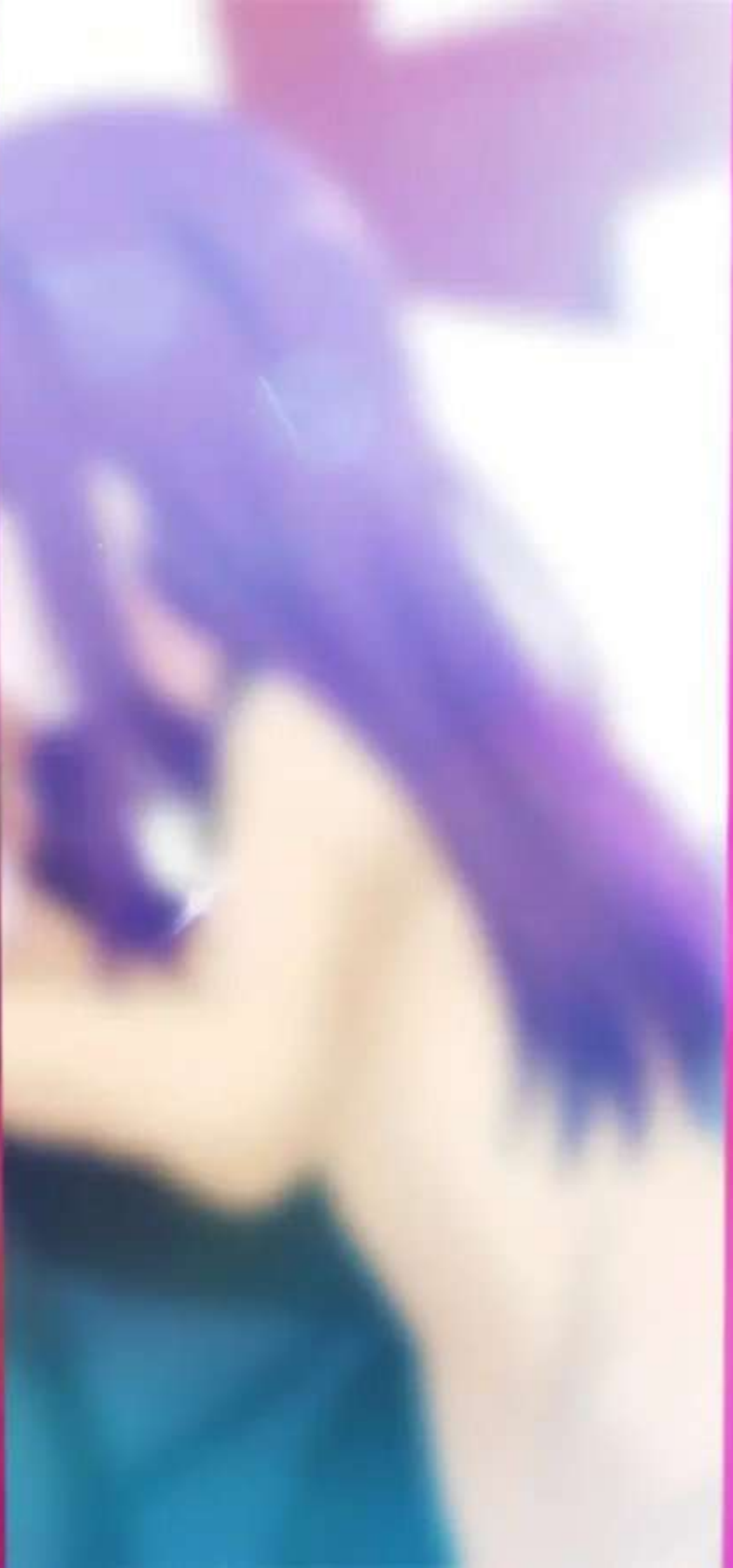
苦勞して店員に気付いてもらい、なんとか部屋を借りる。

自分の部屋へ向かう道すがら、別の部屋のドアの窓から人影が視界に入った。

きっと友達なんかと集まって盛り上がっているのだろう。なんてことないはずなのに、何故だか僕はその人影が気になつてしまい、失礼だとは思つたが遠巻きに覗き見てしまった。

中には他校の男子生徒が何人かいる様子で……
でも歌を歌ってる風でもない。

一人の男子生徒の前で女の子がうずくまって……



女の子の頭が前後に動いて……

(何だろう？まさか……これって……男のあれを
しゃぶってる……？?)

(カラオケボックスでこんなことしてるなんて……う、歌を歌う所なのに……!)

その女の子の雰囲気がちよっと久保さんっぽさを感じてドキドキする……が、顔までは見えない。

(いけない、こんなの覗いたらまずい……どうせ僕が覗いてることなんか気付かないだろうけど……)



とても失礼なことをしたと自分を恥じ、そそくさとそのドアの前を離れた。

その日はなんだか胸がもやもやして気持ちよく歌えなかった。

翌日も、そのまた翌日も、久保さんはいつもの調子で
ちよっかいをかけてくる。

いつも通りの日常が続いている。
そのはずなのに、何か違和感があった。少しぼげで、影を
おびて……

「それでね」
話の途中でまた久保さんのパイシンの通知音が鳴った。

「……っ」

通知を確認し、久保さんは一瞬、見たことのないくらい
悲しい顔をした。

……彼女らしくない表情だった。



あれは何だったんだろうか。本人には聞かないが僕のもやもやは大きくなっていった。

教室で一人、誰にも気付かれずに考えこんでいると、クラス男子がひそひそと話してる声が漏れ聞こえてきた。「すげえ！これマジで久保さんじゃんw」久保さんの名前にビクツとする。何だろう。男子たちの下卑た笑み。気になる……

何だか胸がざわざわする。彼らが何の話をしてるのかわかめたい。僕は気付かれないようにそっと近づき(普通に歩いて近寄っても多分気付かれないだろうけど)彼らの会話を盗み聞いた。

「えっぐう！何人相手にしてんだよこれ」
「これ相手はどこ校？お前の友達どいつなん」
「なあ、この動画俺にも送ってくれよ」

動画？なんの話だろう…
僕はみんなが食い入るように見てるスマホを覗き見た。

!!!!!!

画面には久保さんが複数人と男達とセックスしている…
いわゆるハメ撮り動画が再生されていた。

これって…そんな…まさか…嘘でしょ
久保さん…!?嘘だ…久保さんがこんなこと…

心臓がバクバク鳴っている。
僕が常人であったなら、心臓の音で覗き見してるのが
バレたかもしれない。

でも僕は気付かれない。
誰にも気づかれず一人、シヨックに打ちのめされていた。

白石くんは影が薄い。

普通に教室にいてもみんな彼を見つけられない。

そう友達から事前に聞いていたけど、なぜか私は入学してすぐに白石君を見つけることができた。

友達がおおげさに言っていただけかと思っていたら、本当に存在感が無くて、嘘みたいみんなは彼に気付かない。

あまりにも見つけられなくて、それがすごく面白くて、目が離せなかつた。

私だけが彼を見つけられることと少し優越感のような物も感じている。

私、久保渚咲はいつものように白石君の反応を楽しんでいた。

「白石くんってさ、カラオケボックス行ったことある？」

「え……なんで……」

「白石君の歌声聞いたことないなーと思って。」

「ねえ、もしよかったら今度一緒に……」

『パイン♪』

会話をの途中でスマホからパインの通知音鳴る。




「おっと……ごめんね、白石君」

確認すると中学の友達から遊びの誘いだった。

用件は短く、相談したいことがあるとだけ書いてある。

卒業して数か月会っていない友人。

相談を無下にするわけにはいかないと、OKした。



放課後、タマや葉月と一緒に帰ろうと言ってきたが、今日は用事があるからと断り、待ち合わせ場所へ向かった。予定通り合流し、久しぶりと再会の挨拶もそこそこ。ここに店は決めてるからと言うので友達の案内について行く。

場所はカラオケボックス。

中に入ると友達はカウンターを素通りして中に向かう。

「?部屋は借りないの?」
「別の友達がもう先に入ってるんだ、実は渚咲に相談があるのはそっちでね」

知らない人の相談……自分にそんなことできるのだろうかと思
不思議に思いながら部屋に入ると、知らない男子たちが
すでにいた。

何だか不良っぽい雰囲気をする。

……白石君とは大違いのタイプ……



「あ、はじめましてー」
「へえ、めっちゃうきゃかわいいじゃん」

てっきり女の子の友達かと思っていた私は想定外の光景に
面食らってしまう。

「ど、どういうこと？この人たち……」
「私と同じクラスの友達だよ。せっかくだし多い方が
良いでしょ。まあ座って座って」

こんなもの聞いてない……そう思いつつも、ここまで来てしまつてはいきなり帰るのも失礼かと、言われるがまま促された席に座る。

両隣に他校の男子たちが寄ってきた。

「どうもー渚咲ちゃんって言うんでしょ？あいつから聞いたよ」

「は、はあ……」

「渚咲ちゃん何飲む？これからフードもくるよ」

初対面なのにやけになれなれしい。

しばらく話に付き合つて一緒に飲み食いをした。できれば早く切り上げてもう帰りたい……

「それで、相談つて何だったの？」
しびれを切らして、友達に用件を尋ねる。

「うーん……それはね……渚咲、身体は平気？」

「身体？なんのこ……と……」

そう聞かれて気付く。妙に身体がダルく、頭も重い。呂律も何だか怪しくなってきた。

「え……何これ……」
「効いてきたみたいだね」

「渚咲ちゃん、大丈夫？こんなことされちゃっても抵抗
できないんじゃない？」
隣に座っていた男が私の太ももに触ってくる。が、るくに
抵抗できず、身体がだらんとなっていてしまっている。

「な……なにをしたの……」

「相談なんだけど、こいつらが女紹介しろってうるせんでせめて
悪いけど相手してやってくれない？」

「ど、どういう……」

「じゃ、あたし帰るから！仲良くやってね！」

「ま、待って……！」

私の静止も聞かず、友達はあるさき帰ってしまった。

「もうこうなったら諦めなよWとりま楽しもうW」

「そんな……か、帰る！」

「本気で帰れると思うてんのか？」

中心人物らしき男子の前で膝をつく。

私の眼前には男のいきり立ったペニスがズボンから生えていた。

「さあ、渚咲ちゃん」

「……あの、どうしろと……」

「わかんたろ？」

「……」

私はしばらく躊躇ったあと、もう逃げられないと覚悟を決めて、その口で初めて男のものを咥えた。

「ん……」

「ははは！いいぞいいぞ！」

「すげえ……これが渚咲ちゃんのフェラチオか……」

「たまんねえ……!!」

たまたま

男達は興奮した様子でスマホでその様子を撮影している。

私はというと、目の前にあるそれを舐めるので精いっぱいだ。

「もっと奥までくわえてみようか」

「おごっ!?!」

頭を掴まれ、喉の奥にまで押し込まれる。

「く、苦しい……」

「歯あ立てんなよ。立てやがったらお前の動画ばらまくからな」

「ふぐっ……んっ……」

男のものをしゃぶらされていると、私は視線を感じ、
ドアの方を見る。

（え……!? な、なんで……）

白石君がこちらを見ていた。



（こんな姿……白石くんに見られて……）

一気に血の気が引いて、顔が真っ青になる。

しかし、私と目が合うか合わないかのタイミングで白石君は目をそらす。

待って……!!

「白石君！助け……」

思わず声が出る。が、その叫び声は届かず、白石君は立ち去ってしまった。

あ……あああ……白石君……
果たして見られてしまったらどうだろうか？白石くんのことだ。
私にきづいていたなら黙って立ち去ったりなんて……でも……

考えを巡らせていると、

「なに？彼氏？やってる最中に他の男の名前出すなよW

そこに誰かいんのか？」

「いや？誰もいねえけど」

「まあいいや、彼氏くんには渚咲ちゃんから謝っというてよW」
好き勝手なことを言われる。

「ほれ、再開だ。しゃぶれよ」



「よし、次は俺達の番な」
今度は後ろから抱きしめられ、服の中に手を入れられる。
胸を揉まれたりスカートをめくられると、羞恥心に襲われる。

「はあ……はあ……」
パンツの上からあそこを指でこすられる。

「濡れてるぜ渚咲ちゃん」

「ち、違う！これは……」

「違うないよね？感じちゃってんでしょ？」

「そ、それは……」

「正直になれよw」

「あうっ！」

「クリトリスをつままれる。」

「ここが良いんだろ？w」

「んんっ……んうううううう」

バサッ

あら
あら

グイッ



そのままパンツをズラされ、直に男の指があそこの中に入
り込んできた。くちゅくちゅと音を立ててかき回される。
だめ……このままじゃまた……

「やめて……これ以上は……」
「やめないね。それにしても渚咲ちゃんの中あつたけえ」

そう言う男の指は速度を増して出入りしだした。
周りの男子達にも聞こえるくらい激しい水音をたてる。

ド
ク
ン

ク
ク

あ
あ



「は、早く終わって……お願い……」
「えー？まだ始めたばかりじゃん」

そう言うと男はベルトに手をかけ、ズボンを脱ぎ捨てた。
そして、さっきよりも大きく膨れ上がったものが姿を現す。

「もう我慢できねえわ、さっさとやっちまおうぜ」
そう言うと男は私をテーブルに押し倒した。

ドクドク
ドクドク

ちゅちゅ
ちゅちゅ





「ひゃっ！」
「へへ、もう逃がさないからね」
「ちよつと待って……！それだけ許して！」
「ここまでできてそりゃないよ。それとも何？」
「彼氏としかしない主義とか？」
「そういう問題じゃなくて……」
「じゃあ何だよ？」
「……………」
「私は答えられなかった。
初めては好きな人になりたい。
好きな人……？それは……………」

グイッ

ギンッ

「じゃあ決まりなw」

「そんな……」

絶望に打ちひしがれている間にも、男のモノが近づいてくる。

「力抜けよ……」

「い、嫌……」

抵抗するも虚しく、男のソレが私の中に突き刺された。

ズ

シ
ッ

あああああ
あああ!

「痛い痛い……!」

メリメリと肉を引き裂くような痛みを感じる。
「おいおい、処女だったのかよ。まあいいかw」

「抜いてっ！痛いのっ！お願いっ……！」
「懇願も聞かず、男はそのまま腰を動かし始めた。」

「動くぞ……！」

「待っ……！」

「パンッ！パァン！」

「肌同士がぶつかり合う音が響く。」

「あんっ！ああっ！いたっ！」

「すげえ……はあ……締まる……！」

「もうやめてえっ……！」

「やめるわけねえだろ。」

「お前は俺達の便女になるんだよ」

ガァン

パァン

パァン

か<

か<

か<

「い、いやあ……んはあっ！」
「ピストン運動が激しくなるにつれ、男のものもだんだん硬くなってきた。」

「ああ……出そうだ……」

「ダメ……出さないで……赤ちゃん出来ちゃう……！」

「あぐうう!!」

「ドピュルルル!!ビュクビュクビュクビュウ!!」

「ああああああ……出てる……」

「熱い……出されてる……」

「膣内に精液を流し込まれる。」

「ふう……」

「男が離れると、私の股からは血と」

「白濁色の液体が流れ出た。」

「ドピュウー！」

「ドプッ」

「ドクッ」

「ふふふ、これで渚咲ちゃんは俺たちの女になったな」
「うう……」

「次は俺だ！よろしく頼むぜえ、渚咲ちゃん！」
次の男子が覆いかぶさってくる。

「やだ……やだ……やだ……やだ……やだ……いやあああ!!」
「いい声で鳴くねえw」

かく
かく

かく

グポ

グポ

グポ
グポ

ぎゅん
ぎゅん

さっきまで処女だったのに、容赦なく膣壁を擦りながら
ペニスが出し入れされる。

「あっ……あっ……」
「はあはあ……気持ち良い……気持ち良い……」
「こんなの……嫌だあ……」

「あぁっ出る……出る出る……!!!」

どぴゅうー!!

「あぁっ……」

再び子宮に熱湯をかけられるような感覚に襲われる。

ゴクゴク
ンツ

あぁ
あぁあ
あぁあ
あぁ!!

ド

パ
ン

「嫌っ! いやあぁあ! もう許してええ!」
「渚咲ちゃん、これで経験人数2人目だねw」

「お、おおふ……こんな可愛い子の膣内に射精できるなんて感謝感謝だわ」
「お、お願いします……もう無理です……これ以上はもう……」
「はあ？まだまだ終わらねえよ！」
「俺ら全員満足するまで帰さないからな」
「そんな……」

かく
かく
かく

かく
かく

ズンズン

びび

「おい、誰かティッシュとってこいよ、まんこからお前の精液垂れてんだろw」

「一人ずつやってたんじや埒あかねえから、全身使って奉仕しろよ」
「ほれ、もつと奥までくわえてみようか」

「んぶうう!?!」
喉の奥にまで押し込まれ、そのまま前後に動かされる。

「く、苦しい……」
「歯あ立てんなよ。立てやがったらお前の動画ばらまくからな」
「ふぐっ……んっ……」

一人がずっと私が犯されてる様をスマホで撮影している。
この人たちに命令されているのだろうか。一人だけ気弱そうな人だった。

ちゅぽ
くちゅ

あっや

あっや

あっや

あっや

あっや

ずっ

ずっ

ずっ

ずっ

ずっ

あっや

「はあはあ……渚咲ちゃん……出すぞ」

「俺も……」

「僕も……!」

3人の男達が一斉に果てた。

「ごくっ……んぶう」

ぼんやりしていたから、不意打ちで精液が喉に流し込まれ、むせてしまう。

ビュルルーツ

びゅー

ず

ず

ず

ず

ず

ちゅぽちゅぽ



「げほっげほっ……んぐう……」
「あくあこぼしちやってんじやん。飲めよ全部よお」
「うう……」
「おおっくう！渚咲ちゃん本当に処女だったのかよ？名器すぎるって」
「ドクドクと子宮にも精液が流れ込んでくる。『はあはあ……あ……』」
「ふう……出した出したW」
「次行くぜ」

びびゅん

はあ はあ

はあ はあ

ズンズン



今度はまた押し倒されて男たちが群がってくる。

口とあそこにペニスを突っ込まれる。

「おぐっ……おぐっ……おぐっ……おぐっ……」

「はは、すっげW」

「お、おごおツ」

男の長太いペニスは私の喉元を突いて、
嗚咽が何度もでる。

「へへ、渚咲ちゃんのフェラ顔
最高だな」

ズッ
ズッ

ズッ
ズッ

ぎゅ
ぎゅ

あつや

あつや

あつや

「可愛いブラつけてるね」
「おっぱいはそこそこだけど、

ほんといい身体だよなW」

「ああ……」
「2人分の精液が私の中を満たしていく。」
「はあはあ……これでおまんこの経験人数は4人だな」
「数えんなよw」
「まだあと3人もいるからな」
「カメラ君も頭数入れてやれよ」
「さっきから撮影してる」
「気弱そうな人に話を振る。」

ドブドブ

いぼり

ドブドブ

びく
びく
びく

「ぼ、僕……?」
「ああ、最後に使わせてやるからしっかり撮れよお」

「ほれほれ！もっとケツ振れっ！」
立ち上がって、今度はバツクから突かれる。
「あっ……あっ……あっ……あっ……」
「はあはあ……渚咲っ！最高だよお前はッ」
パンッパン！と激しい音を立てて腰を打ち付けられる。

びくびく

びくびく

「やっ！ああっ！痛いっ！あんっ！ああっ！」

パン！

パン！

パン！

パン！

あっあっ

「いい声だねえ渚咲ちゃん♪」
「いいぞいいぞW」
「ろくな抵抗もせず、ひたすら男達に身体を好き放題される。
私はただひたすら喘ぎ続けることしかできなかつた。」
「ああ……出る……出る出る……!!!」
「どぴゅうー!! ビュービュー!!」

ド
プ

ッ

ベ
ク
ン
ッ

び
ゅ
ー

「ああ……」
「勢いよく膣内に射精された。複数人の精液で子宮はもう逆流するほど満たされる。
(ああ……熱い……)」

「はあはあ……気持ち良かったあ」
「ふう……ふう……これで全員か？w」
「いや、一人忘れてるだるw」
「ああ、そうか、でも悪りい！まだ満足してないから2周目いくわー！」
「まじかよ」

かく
かく

かく

かく
かく

どし
どし
どし

「うう……お願いです……許してください……」
「何言ってるんだ。まだまだ終わらねえよ」

男子たちの欲求はますます苛烈を極めた。
口はもちろん、おまんことお尻の穴両方とも挿入される。

「うぐうおおおーっ」

3穴同時に挿入された、さらに両手にも握らされる。
全身を男達に使われた。

「アナルもすっごお……！便器の才能あるわ」

「初めてのアナルが2穴って、もう普通のセックスじゃ満足できない身体になっっちゃったねw」

ぐっぽ
ぐっぽ

「くっそ、こいつ名器すぎ……すぐ出ちまいそうだぜ」
「こっちのおまんこもいい感じに締め付けてくるぜw」

ズポ

ズポ

ズポ
ズポ
ズポ

ミチ
ミチ

(うう………苦しい………)
休む間もなく次々と肉棒を突き立てられる。
(苦しいよう………)
「はあはあ………出すぞ！全部受け止めるよおおおー！」

ド
プ
ッ

ド
ク
ッ

ど
び
び
る

ドピュドピュドピュ！また子宮と腸内両方が熱くなる。
「ぶぐうおおーっ！んおおおおお!!」



「はあはあ……あ……う……」
お腹の中に大量の精液が流れ込んでくるのを感じる。
身体の中も外もザーメンまみれで、もはや自分の身体に綺麗な部分など
残されていない。

「ああ、またすっげえ出たわ……」
「服ももうベトベトだ……この子カラオケボックスからこれ着て帰るん？w」

どく
どく

ゴク
ゴク
ゴク

どし
どし
どし

「とりま渚咲ちゃん、もうぜんぶ抜いじやおうか」
「んふう……」

「あゝもう我慢できねえ……いくぜっ」
ドピユツッ! ドピユツッ! ドピユツッ!
「んひいいい! い、いやだあ!」
「俺もいくぜえ!!」
ドピユツッドピユツッ!! ビュルルル!!
「ひやめえええ!!」
またおまんことお尻の穴の
両方から大量に流し込まれる。

プ
ッ

ド

あ

あ

あ

ビュッ

わわわわ
ああ
ああ
ああ!!



「はあはあ……はあはあ……」
「おおお……おっ、おほお……おっ」
「渚咲ちゃん、膣内出し気持ちいい？」
「何回も何回も射精されてお腹たぷたぷになっちゃったね！」
「今もなお精液を放出しながら男達は笑う。」
「こんなの……酷いよお……！」
「おいおい、まだ終わるじゃあないんだから泣くんじゃねえよW」
「まだ終わらないのか……。」

びゅん
どびやる

どく
どく
どく

びく
びく

びく
びく

かく
かく
かく
かく
かく

かく

私は絶望に打ち拉がれながらも、
どこか冷静だった。
（私……これからどうなるんだろう……）

「さすがに疲れてきたわW」
「俺はまだまだいけるけどな」
「前も後ろも、入れ替わり立ち代わり男子たちのペニスを
ねじ込まれ使用される。僕のも舐めて♪」
「渚咲ちゃん、僕のも舐めて♪」
「フエラ上手だね♪」

かく
かく
かく
かく
さちぽ
くさちゅ

「ううう……うぶっ……」
顔にも髪にも、胸元にも容赦なく精液をかけられていく。
身体中ザーメンまみれでもうドロドロだ。

グポ
グポ
グポ

「オラッ孕め！渚咲！！」
本日何度目かの射精。
「ああ……ああああああああ……」



子宮も腸内も、胃袋までも精液で満たされる。
数時間前まで処女だったとは思えない姿に成り果てていた。

「はあはあ……はあはあ……」
「ふう……気持ち良かったわ」
「じゃあ次は俺ねw」
「うう……」

延々と続く凌辱に私は疲労困憊だったが、男達は疲れを知らない。

バトシタッチしてまたさっきの男子が挿入ってくる。私は何度も犯され続けたのだった。



ぽんぽん

「ふう……ふう……ふう……ふう……ふう……」
あれから何時間経ったんだろう。もう時間の感覚もない。
（どうして……私がこんな目にあわなくちゃいけないの……？）
泣きたいけれど涙すら出てこない。
「うっ……」

かく

かく

かく

かく

かく

びく

びく

びく

びく

ぽん

お尻の穴から男達の出した大量の精液が逆流してくる。

「うっ……くっ……」

身体の奥底まで汚されたような気分だ。

「はあはあはあはあ……」

全身をザーメンまみれにして床に横たわる。

「そろそろか、じゃあ俺たち帰るから！」
「またねー！渚咲ちゃん！」
「おい、お前の番だぞ。後はちゃんと片付けるよ」
「あ……はい……」
撮影係の男の子にそう言うのと男子たちは帰っていった。



プルルル……プルルル……
部屋のインターフォンが鳴る。
退室時間を知らせる電話だろう。撮影係の男の子が電話に出る。
「あ……はい、はい。すいません……その……延長で」
受話器を置くと、男の子は血走った目で私を見る。「セックスしようね……」
「やっと僕の番なんだ……久保渚咲さん、セックスしようね……」

びく
びく

かく
かく
かく
かく

びく
びく

ぽん

——それから数週間たった。

私はいつも通り学校に通い、いつも通りの生活を送っている。
あの日の直後、白石くんに話しかけるのはかなり緊張したが、
彼はいつも通りのようすだった。
カラオケボックスで見た彼は見間違いだっただのか、
それとも彼が私だと気付いてなかったのか……

真相はわからないが、知っていたら彼はこんな
ポーカーフェイスはできないと思う。

「……良かった……」

「……何が？」

「……何だろうね」

本当、何が良かったのだろう。

スマホのバイブレーションが振動する。
……また呼び出した。

あれから毎日のように、写真に脅される形で男たちと会い、そこでまた犯されている。徐々にもう快樂に負けてしまったほうがマシだと考えるようになり、セックスに溺れていった。

すっぢゃ

すっぢゃ

すっぢゃ

すっぢゃ

すっぢゃ

すっぢゃ

「いいぞお！渚咲！」
「はあ、はあ、おちんちん熱い……！」
淫靡な音を立てて、男たちのペニスをしごく。

ポタッ

「あはああくあつ、あひい……」
私の身体が男達の手で変えられていくのがわかる。
つい最近まで男を知らなかつたのが嘘のように、セックスに最適化していく。

びゅーッッ♥
びゅーッッ♥

ポタッ

「はあはあはあ……」
「渚咲ちゃん、可愛いよ」

「あはっ、あっ、あちゅい……ふわあ……」
顔にも胸元にも精液をかけられる。
この瞬間が一番気持ちいい。

はあ

はあ

はあ

はあ

ドロツ

「ふう……渚咲ちゃん最高だよ」
「ありがとうございます……」



「すっげえ!!こいつは名器だぜッ」
男達は必死で私の股に下半身を打ち付けてくる。
「んおっ、おほっ、おおおお!!」
まるで獣のような声を上げながら、
私は今日も犯され続ける。
「ああ、渚咲ちゃんのおまんこきもちいいよお」

「あん、ああ、はあああ……」

かぐ

かぐ

かぐ

パン

ガッ

ガッ



「気持ちよすぎてすぐ出しちゃった」
 「はい交代交代！」
 「次は俺な。渚咲ちゃん、入れさせてね」
 「あひい：は、はいいい：……」
 「まだまだ終わらない陵辱劇。」
 私の日常は壊されてしまった。

あひっ♡

あひっ♡

どびやる

か

か

か

か

か

「おおっ！これは確かに最高だなっ！」
相手をする男子たちの顔触れは毎回微妙に違う。
はじめて見る顔もちらほらあって、このことを
知る人間が増えていることに不安に思う。

「ひぎ…っい…あああっ！」

かく
かく

かく

グポ
グポ

ぎゅの
ぎゅの

グポ
グポ

「やべえ…もう我慢できねえっ」
「ああ…ああ…ああ…ああ…ああ…」
パンパンパンと肉のぶつかり合う音が響き渡る。

「あああああ〜！ イイツ！ もっと激しく突いて下さいっ！！」
「あいついたら卑猥な言葉を使って快楽を求めている自分がある。」
「うおおっ締まるっ……うっ、イクっ……いくっ……ううっ」
ドピュッドピュ——！！

ゴクンッ

うわあ
ああ
ああ
ああ！！

ド

ピ



「はあはあ……お腹いっぱい……」
膣内に大量の精液が流し込まれる。

「はあはあ……はあはあ……」
「渚咲ちゃん、僕ともお願いね」
「はあはあ……はい……」

ドピュン
ドピュン

「あふう……」
「じゃあ次俺な」
「次は僕の番だからね」
「はい……よろしくお願ひします……」
「身体中ザーメンまみれにして私は笑う。」
こうして私、久保渚咲の日常は汚されていった。

……スマートフォンの中の久保さんは普通の彼女とはまるで別人のようだった。淫靡な表情で知らない男の人たちとまぐわっている。「なん……で……」
「こんな久保さんは見たくない、けど、目が離せない。」

「白石君……見ちゃったんだ……」



ビックリして振り返ると、いつの間にか久保さんが立っていた。

「く……久保さん……!?!」

「白石君には知られなくなかったな……」
そう言って彼女は男子たちの手からスマホを奪う。

「あ……うう……」
言葉が出ない。目の前にいるのは本当にあの優しかった久保さんだ。



「私ね、こんなふうに毎日何人もの人とエッチなこと……
してるんだ……」
自嘲気味に言う彼女の姿は痛々しげだった。

「もう……ダメなんだね」

久保さんはスマホを男子たちに返し、教室を出ていった。

……その日を最後に、久保さんが学校に来ることは無かった。

教室を飛び出した私はあてもなく外を歩いていた。

もう学校には行けなかった。家族になんて言おう。目の前が真っ暗だった。

「あれ？久保さんじゃん」
声をかけられて気付く。他校の男子生徒たちがこちらに近づいてくる。

「俺のこと忘れた？中学一緒だっただろ」
そう言われて、知った顔だと気付く。でも記憶よりずいぶんチャラチャラした姿になっていた。

「驚いたよ、まさかあの久保さんがこんなことしてるなんて」
そう言っていてスマホの画面を見せる。……どこまで拡散しているのだろうか。

「俺ずっと久保さんとやりたいと思ってたんだよね。」
俺達とも遊んでよw」
そう言っていて下品に笑う男子たち。

「あ……いや……それは……」
「いいだろ？」
肩を掴まれる。
振りほどこうと思ったが、その気力がわからない。

(もう……どうでもいいか……)

「いいよ、遊ぼう」

流されるまま男子たちとラブホテルに入る。
「すごい……!あの優等生だった久保さんが俺のチンポ舐めてる……!」

「んむ……んちゅ……んちゅ……」
「おい、こっちも頼むぜ」
「んふう……んちゅ……ちゅぱっ……」

「すげえ……これが噂の名器って奴か……」
「ああ……ああ……気持ち良いです……」

あっや

あっや

あっや

あっや

あっや

ずっ

ずっ

ずっ

ずっ

ずっ

あっや

ズロズロ

はあ
はあ

ぶびゅん

はあ
はあ

「はあ……はあ……はあ……」
「まだできるよな、渚咲ちゃん」
「はい……もつと、もつと下さい……」

ズロズロ

こうして私の日常は一変した。

毎日学校に行かず不良たちと会って、セックスの相手をする。
時には知らないおじさん達に身体を売ってお金を渡す。
「うぶ……うぶぐう……うっ」
「おお……渚咲ちゃん……肉便器の才能あるよ！」

ズコ

ズコ

ズコ

ズコ

ぎち
ぎち

かく
かく

かく
かく

かく

「はあはあ……ん……っんんう……っ！」
今日も私は、知らない男に犯されて悦んでいる。

あっや

あっや

あっや

「たっぷりの中に注いでやるぞ！」
「んおおおおッ」
ビクンッと仰け反りながら絶頂を迎える。

んかっ♡

んかっ♡

ドブッ

ビクンッ

ビクンッ！

んほおおお
おおお
っ

「こっちも出すぞッ！」
「ふぐうーっ！んぐっ！んんぶううー！」
喉奥までペニスを突っ込まれ、口の中いっぱい広がる精液の味。
「はあ……はあ……」

ズブズブ

だっだっ

びく
びく

びく
びく

びゅー

「あひい……」
何度も膣内に射精されてお腹の奥が熱い……。

「ひ…っやあ…っ！身体が壊れちゃうツ」
「うへえ…スツゲ！ギチギチに締まってるツ!!」
「ひぎいいっ、激しすぎますう…ふわあ…」
「あ…ふわああん…っ」

びくびく

びくびく

バンバン!

バンバン!

バンバン!

あーあー

バンバン!

子宮口を突かれる度に、意識が飛びそうになる程の快感に襲われる。「くぅ……また出る……イクイクイクイクウウッ！」

ゴクンッ

あああああ
あああああ!!

びゅーっ

ド
プ
ッ

「はあはあ……おほおお……おっ」
「次は俺の番だぜ」
「ま、まっつて……まだ……イってりゅ……おおお……」

かく
かく

かく

かく
かく

どし
どし
どし

「休む間もなく次の男の人が入ってくる。
「おほっ、お、おおっ、おほおおおっ！」

「はははっ！このマンコ最高だよオ！」
「へははっ！ふぶうっ！」
「全部の穴に一気にペニスを突っ込まれて蹂躞される。」
「はあはあ……あひい……んふう……あひっおごおッ……」

ぐっぽ
ぐっぽ

ズポ

ズポ
ズポ
ズポ

ミチ
ミチ

「あふう……はいい……んぐっ私、肉便器れすう……」
もう何も考えられない。ただひたすらに快楽を求めるだけの淫らな雌豚。

びゅーっ

どく

どく
どく

ゴク
ゴク
ゴク

「まだまだ行くぜえ」
「はひい……んぐっ……あひがとうございまふっ……
んぐ……もっと使ってくださいはい……」
来る日も来る日も、私は男達の性処理道具として
弄ばれ続けた。

学校に行っていないことが家族にバレて、
家出してからは起きてる間はずっと
セックスする生活になって

……私はもう戻れないところまで来てしまった。
でももうどうでもいい。こんなに気持ちいいんだもの。

どし
どし
どし

びし
びし

びし
びし



そして数か月後、散々膣内射精され続けた私は妊娠し、臨月を迎えようとしていた。

「渚咲ちゃん、立派なお腹になったねW」
「ほう：：んああ：：っ」
「おろすのかと思ってたのに結局そのままになっちまったな」

このお腹になっても、男たちは私の身体を求めてくる。
お腹の赤ちゃんのことなんかお構いなしに私の中に射精する。
「そろそろ産まれるんじゃない？」
「ああ、そうだな。俺たちも楽しみにしてるよ」
「はい：：：頑張ります：：：」

ポタポタッ





あーっあーっあーっ

「ぶはっ！母乳出てる！」
「はあ……はあ……んああ」

「ほれ、出産祝いだ！受け取れ！」
「私の身体に熱々の精液が降り注ぐ……」
「んはああ♡熱いいい……！はああ」

正 下正

正



「はははっ！母乳まだ出てるぜw」
「うう……恥ずかしいですう……」
「じゃあ今度は俺が出す番だな！」
「はい……お願いします……」

ドロツ

「そう言っって私はまた男根をしゃぶり始めた。
「んぶっ……んちゅ……じゅぽ……んんうっ……んんっ」

「こんな腹して締まるなあ……最高だ！」
「おほおっ！赤ちゃんがつぶれちゃうツ……んほおお」
「そらそら！どんどんいくぞ！」
「んひいっ、ど激しいッ、ダメッ、そんな激しくされたら、
またイっちゃいます……っ、イグウウツ！」



かく
かく

かく
かく

かく

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ
ズッ
ズッ

正 正 正

ズッ
ズッ

ズッ
ズッ



「はあはあ……はあはあ……」
 「あひやあ……ん……ふああ……あへあ……」
 「おいおい、休んでる暇はないぜ」
 「あひい……ま、ま……今イッたところだからああ……
 ……あへあああ」

休む間もなく次の男がやってくる。

ビュッ

正 正正

正 正

とく とく

ん♡

あ♡

ん♡

あ♡

あ♡

ん♡

びゅ

びゅ

びゅ

「ぐちよぐちよマンコが絡みついて来やがる！」
今度はバックで2穴を突かれる。先ほどよりもっと深く、
膣穴をえぐる。

「ひゃう…いやあ…あっあッあああ……ツイグッああ」
「清纯そうな面してたのに、とんだ淫乱女になっちまったなあ！」
「は、はい…いい…いい…わ、わたしは淫乱肉便器れすっ！あひいいい」

パンツパンツパンツパンツ！

かくかく

かくかく

かく

子宮口を何度もノックされて意識を失いそうになる。

正下

めすめす

正下

「フーッ…出した出した」
「じゃあ渚咲ちゃん、俺ら晩飯食べに行くから部屋の掃除しとけよ」
「は、はい…わかりました…」

「さすがは肉便器だな！」
「あ…ありがとうございます」

私は肉便器。男達に犯されるためだけに生きています。
でも、それでいい。私は肉便器。
それが今の私にとって一番幸せなことなのだから。



「久保さん……」

「……えっ……」
男達と入れ替わりで、男の子が入ってくる。
男達はすれ違ったその子に気付かなかつたようだ。

「遅くなつて……ごめん。その……ずっと探してたんだ。ごめん……本当にごめん……」

「……どうして泣いてるの」

「ごめん……こんなにボロボロになつてるなんて思わなくて……」

「……」
彼が何度も何度も謝る。私は黙ってそれを聞いていた。
これはきつと夢だ。都合のいい幻だ。幻の彼が私に手を差し伸べる。
「一緒に帰ろう、久保さん」

私は、その手を取った。

















































































































































正

正正

正正









